

CLIL 実践の展開 - 「カエルの一生」の実践から -

藤原 真知子・相羽 千州子

はじめに

筆者らは、CLIL (Content and Language Integrated Learning: 内容言語統合型学習) の4つの構成要素(4C)である内容 (content)、言語 (communication)、認知 (cognition)、文化 (culture) などの基本的な考え方の多くを欧州の教育者・研究者から学んできた。

同時に筆者らは、長年の児童英語・小学校英語教育経験を土台に、日本の小学校の教育環境に適したCLILの在り方を模索しつつ、内容と言語のバランスを考えながら、授業を組み立て、実践を行っている。

本稿では、他教科の内容を英語の授業に取り入れ、その内容をさらに発展させていく小学校でのCLILの実践例を紹介する。

「カエルの一生」のCLIL実践

小学校の理科でカエルを学習するねらいは、卵からおたまじゃくしになり、カエルに成長していくカエルの特性に気づき、関心を持つことにある。さらに、エラ呼吸から肺呼吸へと、呼吸法の変化を知ることにもある。

筆者らは、英語の時間の一部を使い、導入・定着・発展の段階を追ってCLIL学習に取り組んでいる。

ウォームアップ

カエルの写真を見せ、児童が知っている言葉と内容を使い、ウォームアップをする。これは次に続く「導入」を行いやすくすることが目的である。対象児童の学年・英語学習状況などにより、ウォームアップの内容は多少変化する。

以下はカエルの写真を見せながら行う質問の例である。

Let's look at this picture.

What's this?

What color is this frog?

Is this frog big?

Is this frog jumping?

Look at the eyes. (Are they) small or big?

導入段階

「カエルの一生」を表わす英語を児童に導入する。

①日本語と英語のカエルの鳴き声を比較する。

ケロケロ、ゲロゲロ、クワックワツ、ribbit, ribbit, croak, croakなどを教える。児童になじみのある「カエルの合唱」をまず日本語で歌い、次に英語で歌う。難しい場合は、鳴き声の箇所だけを英語にして歌う。

We can hear the frogs sing,

We can hear the frogs sing,

Croak, croak, croak, croak,

Ribbit, ribbit, ribbit, ribbit.

Croak, croak, croak.

②カエルの一生 (Frog Life Cycle) のカード6枚を使い、グループやペアで成長順に並べる。終わったら順番が合っているか確認する。ダミーのカードを1～2枚入れると、より児童間の会話が増える。

③大きな絵カードを使い成長過程の英語を学習する。egg - tadpole - back legs grow - front legs grow - a tail disappears - frog (図1参照)を教え、児童に繰り返して言わせる。

Frog Life Cycle

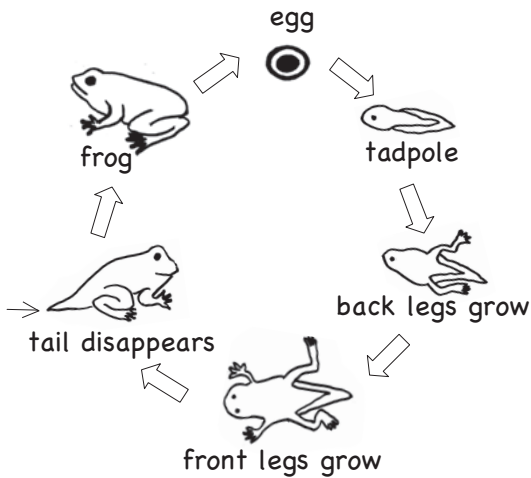


図1 カエルの一生

定着段階

①歌と動作で英語を身に付ける。

教師が動作をつけてFrog Life Cycle Songを「オタマジャクシはカエルの子」(元歌はアメリカ民謡)の替え歌で歌い、児童は教師の後について、真似をする。児童は体を使って英語を覚える。

Frog Life Cycle Song

1. Tadpole, tadpole,
It's a baby frog.
Tadpole, tadpole,
It's not a fish.
Back legs grow.
Front legs grow.
A tail disappears.
Oh, yes! It's a frog.

2. Hop, hop, hop, hop,
Hop on the land.
Swim, swim, swim, swim,
Swim in the pond.
Ribbit, ribbit.
Croak, croak, croak.
Ribbit, ribbit.
Croak, croak, croak.

(©2011 Machiko Fujiwara, Chizuko Aiba, & Brian Byrd)

②次に、教師と一緒に児童が動作をつけて歌う。何回か繰り返し、児童に英語を定着させる。

③グループで歌に合った独自の動作を考え、児童は歌と動作を発表する。

④カエルについての教師の質問に児童はYes/Noで答える。

質問例：

- | | |
|-------------------------------|--------|
| Frog eggs are very big. | (No.) |
| Tadpoles can hop. | (No.) |
| Frogs get back legs first. | (Yes.) |
| Frogs have tails. | (No.) |
| Frogs can swim and hop. | (Yes.) |
| Frogs have big eyes. | (Yes.) |
| Tadpoles are baby fish. | (No.) |
| Tadpoles can swim. | (Yes.) |
| Tadpoles go "ribbit, ribbit." | (No.) |
| Frogs have 6 legs. | (No.) |

次の時間、復習する際にスピードを速くしたり、質問の順番を変えたりすると良い。また、これらの質問をリスニングテストとして、使うこともできる。

⑤カエルの成長過程に関するワークシートを使い、内容の確認をする。単語を書き写したり、クロスワードパズルをしたり、成長過程の絵に番号をつ

けたりさせる。

発展段階

導入段階で学習した内容に、新しい内容を加え、発展させる。英語の語彙や表現を児童にインプットさせ、さらにコミュニケーション力を高める活動を行う。

①おたまじゃくしとカエルの呼吸法の違いを比較し、その表現を学習する。そのあと、寸劇を行う。まず、breathe with gills（エラで呼吸する）、breathe with lungs（肺で呼吸する）という表現を教える。児童は、おたまじゃくしやカエルになり、自分のことを英語で話す。

I am a tadpole.
I have a tail
I can swim.
I breathe with my gills.
I eat plants.

I am a frog.
I have four legs.
I don't have a tail.
I can swim and hop.
I breathe with my lungs.
I eat bugs.

児童のレベルにより、英文を読んだり、書写したりなど、リーディングやライティングを取り入れると良い。

エクストラアクティビティ

カエルについてのCLIL実践は、さらに以下のようなカエルのプロジェクトとして展開させることもできる。

①Frog life cycleクラフトを作る。

Frog life cycleの絵や単語・英文を書いたポス

ターや、モービル、絵本などをグループや個人で作成する。カエルの成長の表現を確認し、いつでも目にすることができ、確実に学習したことが定着する。

②児童になじみのある物語を使う。

1) 『Frog and Toad Are Friends:Letter』(邦題『ふたりはともだち：おてがみ』)は1・2年生の国語の教科書にも採用されている。児童にとってなじみのあるこの物語を英語の動画で見せたり、英語で絵本を読み聞かせしたりするとよい。物語の中で児童が自分の一番好きなフレーズを英語で覚えて、気持ちをこめて言えるようにする。

2) 『Frog and Toad Are Friends:Spring』(邦題『ふたりはともだち：はるがきた』)は、かえるくんが冬眠したままのがまくんを起こしに来て、二人で春を見つけるとい物語で、冬眠(hibernate)という概念の理解につながる。

③FrogとToadの違いを比較する。

児童にガマガエル(ヒキガエル)について調べたことを課題に出す。調べたことを使って、FrogやToadの役になり、紹介し合う。

紹介例

Hi, I am Toad.
I mainly live on the land.
I am big.
I have short back legs.
I crawl a lot.

Hi, I am Frog.
I live near the water.
I am not big.
I have long back legs.
I can jump very high.

④児童に熱帯雨林のカエルの写真や動画を見せる。

児童は、今まで見たことのないカエルを見て、驚きの表情を見せる。生息地を世界地図で示し、国や気候などについて学習をすると、さらに興味を持つ。

⑤絵本、写真、動画などで見たカエルの色の折り紙（緑色、茶色、赤、青、黄色など）でカエルを折り、どの位跳ぶかグループでhopping レースを行う。折り紙を折るときに必要な英語表現や、レースに必要な英語も児童は知ることができる。

On your marks, get set, go!
(位置について、ヨーイ、ドン。)
Red frog wins!

⑥欧米で人気のあるカエルの歌を歌う。

欧米の子どもが歌うカエルの歌、Galumph Went the Little Green Frogや、Five Little Speckled Frogsを紹介し、皆で歌ってみる。前者はカエルの特徴的な動きがよく表わされており、後者はカエルが虫を食べる様子や、水の中に飛び込む様子が表わされている。これらの歌を動作とともに歌うとカエルの特性がよくわかる。

⑦外国のカエルの絵本に触れる。

『Jump, Frog, Jump!』や『The Princess and the Frog』など、海外の子どもになじみのあるカエルの絵本を楽しむ。

実践の展開

筆者らのCLIL実践では、他教科で学んだ既知の内容を、英語や外国語活動の時間にCLILの実践で行うことが多い。既知の内容を扱うことで新しいことを学ぶ興奮や興味が失われるという意見がある。しかし、このように内容を発展・展開させていくことで、児童は新たな学びに触れることができる。

1) 内容と言語のバランス

内容の既知・未知と言語の既知・未知とのバランスを考える際、Coyle他(2010)の、内容と言語の親しみと新しさの連続体の考え方が参考となる。CLIL授業のPlanning Circleの中には、縦軸に内容の既知・未知、横軸に言語の既知・未知を表す二つの軸により作られる4つの領域があり、学習が進むにつれて、1→2→3a→3bと領域を移動するとされる(Coyle et al. 2010, p.95)(図2)。

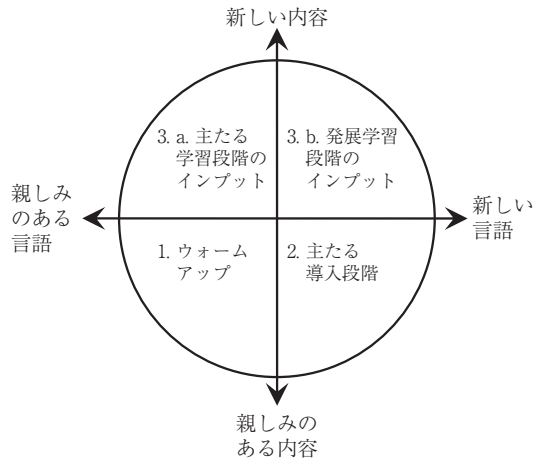


図2 内容と言語の親しみと新しさの連続体 (Coyle et al., 2010, p.95)

筆者らは、日本の英語教育環境では言語の負荷が大きいと考え、実践では領域2に十分な時間を割いている。「カエルの一生」のCLIL実践では、導入・定着がこの領域に該当し、発展、エクストラアクティビティでは領域2から次第に領域3へと移行する。この領域3は必ずしもaからbへと段階的に移行するとは限らず、アクティビティにより変わる。

CLILの実践では教師は、授業のさまざまな段階で、内容と言語のバランスと取りながら学習を前進させることが求められている。Coyle が示した図2はCLILの実践を考える際、バランスを考える上で重要な指針を示してくれる。

2) 内容の発展・展開

「カエルの一生」では、両生類 (amphibian) としてのカエルの特性を理解することとおたまじゃくしからカエルになる 変態 (metamorphosis) を理解することをねらいとしている。このCLIL実践で児童が演じた寸劇の"I breathe with my gills/lungs."という台詞にも表れるカエルの呼吸方法の変化に焦点を当てることができれば、このねらいが達成されると考えられる。

しかし、CLIL実践の目的をこれらの理解だけに限定すれば、実践の豊かさが限れてしまうかもしれない。展開/エクストラアクティビティで紹介した『Frog and Toad』などからも児童は多くのことを学ぶことができる。CLILを特定の教科で扱う内容のみとしてしまうと、それはEAP (English as Academic Purpose) に近いあり方となる。これに対し、同じ題材に理科からもまたこのような児童の物語からもアプローチするような、分野横断的な (transdisciplinary) 学びをCLILは取り入れることができる。内容を発展・展開させていける可能性があることもCLILの魅力といえよう。

まとめ

今回示したCLIL実践例は、CLILの内容をどのように発展・展開させ、児童が楽しみながらその学びを広げていけるかを紹介した。対象児童の学年、英語レベル、教育環境などにより実践は異なる。ここで紹介したのは一例にしか過ぎないが、児童が楽しみながら他教科の内容を理解し、その英語表現を身につけ、さらに学びを広げていくことのできるCLILの実践を、筆者らは内容と言語のバランスをとりながら行っている。

欧州で育まれたCLILが日本でも知られるようになってきたのは事実であるが、それでもまだ多くの教員に認知されているとはいえない。本稿が日本でのCLIL認知度向上に役立つことを願っている。

引用文献

Coyle, D, Hood, P, & Marsh, D. (2010). *CLIL : Content and Language Integrated Learning*. Cambridge : CUP.

参考文献

Hamilton, Jean. (2005). *The secrets of tropical rainforests*. CA : London Tower Press.

Kenshole, F. (2010). *Let's go to the rain forests*. Oxford : OUP

Lobel, A. (1970). *Frog and Toad are friends*. NY : HarperCollins.

有馬朗人ほか (2015). 『新版たのしい理科4年』大日本図書株式会社.

(ふじわら・まちこ 聖学院大学総合研究所特任講師)

(あいば・ちずこ 東京電機大学講師)